第5回 モーツァルト交響曲 全曲演奏会

2009年8月9日(日)

◆開演◆ 14:30◆

会場：才能教育会館ホール

主催：モーツァルト交響曲・全曲演奏会 実行委員会
共催：長野県松本深志高等学校音楽部志音会・松本室内合奏団・松本交響楽団・安曇野シンフォニー楽友会・松本あづみの音楽祭
後援：松本市・松本市教育委員会・塩尻市・塩尻市教育委員会・安曇野市・安曇野市教育委員会・(社)才能教育研究会
信濃毎日新聞社・SBC信越放送・NHK長野放送局・長野エフエム放送・(財)八十二文化財団

よこしまかつと

本当にモーツァルトの作品なのか？ ずっとモーツァルト作だと信じられてきた第37番 KV444、ローマで作曲されたが父親が作曲者である可能性がでてきた KV81＝KV71l。なぜこんな状況になっていったのか、私なりに考察していきたいと思います。
モーツァルトは全部で約50曲以上の交響曲を書いています。第41番まである伝統的な番号順（モーツァルト交響曲・全曲演奏会一覧表参照）には、いくつかの偽作が含まれているばかりか、何曲かの真作を除外されており、さらにその順序もかなり混乱しているのです。

【疑作と偽作】

18世紀後半の多くの作曲家の研究に比べると、モーツァルトの場合は作者をめぐる問題に悩まされることは少ない（この点、もっとも研究者を困惑させるのはハイドン兄弟であろう）。とはいえモーツァルトにも興味深い問題をはらんだ作品が多数存在する。1964年にケッヒェル作品目録第6版が刊行されて以来、とりわけプラハ（またチェコやスロヴァキア全般）の資料が西側の学者に解放されて以来、疑作と偽作の数は増加の一途をたどっている。その詳細は、ようやく1960年代になって目録にも掲載されるようになった。

1750年から1800年のあいだに活躍した有名な作曲家なら誰しも、生前は、この類の盗作行為を免れることはできなかった。（確かにイギリスでは、再版に関してのみ著者に限られた権利が認められていたものの）当時は、著作権という制度がまだ確立しておらず、あまり名の知れない作曲家に、有名な作曲家の名前を借用する事は日常茶飯事であった。有名な事例は、ローマン・ホフシュテッター師と「ヨーゼフ・ハイドンの作品3」の《弦楽四重奏曲》の場合である。パリの出版社ユベルティは、作曲者であるホフシュテッターの名前を印刷版から取り除き、かわりにハイドンの名前を入れて出版した。結局、この作品はしばらくのあいだ、ハイドンの作品3として知られていた。

当時の音楽家たちは、作者をめぐる真正性の問題を十分に意識していた。1762年、ライプツィヒのブライトコプフ・ウント・ヘルテル社から刊行された主題目録の「あとがき」には、次のような記述が見られる。

「すべての作曲家に対し、その人の作品をその人のものと認め、またさまざまな作曲家の名で現れる作品について、それぞれ正しい作者を見出そうとするなら、どれだけ多くの相矛盾する衝突を解決しなければならず、また目に見えない闘いを克服しなければならないことだろう！このように疑わしい状況に遭遇した場合 ――こうしたケースはあまりに多いのであるが――、問題を探求してみても、それを解決するどころか、いともたやすく判断力をなくし、正しい道の代わりに間違った道へと導かれてしまうばかりなのである。」

その25年後、この状況はさらに悪化した。専門の写譜師による筆写譜の流布は、中央ヨーロッパでは慣習的なものであったが、これに代わって印刷譜が次第に支配的になっていったのである。パリでは、J.ハイドン、カール・シュターミツ、ロゼッティなど、人気の作曲家たちの名前を使って、無名の作曲家の作品シリーズ(opera)が出版された。モーツァルトの名はゆっくりとウィーン以外のヨーロッパへと広まっていったので、彼が亡くなった時点では、偽りの出版というのはほとんどなかった。しかしほんの二、三年のあいだにモーツァルトの名が一気に広まったため、ほとんどの無名の作曲家の作品でもモーツァルトの名で売れば、出版社の懐が肥えるという状況へと変化したのである。

フランツ・ニーメチェックによるモーツァルト伝（第4回全曲演奏会プログラムノート参照）が出版された1798年にはすでに、次のような意味深い言葉を読むことができる。これはのちにケッヒェルが「偽作」を判断するモットーとして掲げたものである。

「彼〔モーツァルト〕の作品をめぐり、編曲者や音楽出版者たちは激しい狼藉をはたらき、その結果、聴衆はしばしば騙され、巨匠の名声もたいそう傷つけられてきた。彼らは彼の才能とはまったく不釣合いなたくさんの駄作に、まずは推薦用のレッテルとしての彼の名を掲げている。」

これまでに多くの作品が誤ってモーツァルトの作品と見なされてきた。正当な根拠がほとんどない作品を挙げるだけで歌曲60曲、ケッヒェル第6版には載っていない60曲あまりの教会音楽の小品等が存在している。

〔すでに親しまれてはいるが、ケッヒェル作品目録に掲載され、モーツァルト作曲ではない作品を数曲ご紹介しよう。〕
交響曲　イ短調　K.Anh.220 (16a)　デンマークで発見されたがかなり疑義がある
交響曲　ニ長調　K.Anh.219　レーオポルト・モーツァルト作曲（《ブライトコプフ目録》、1766）
交響曲　変ロ長調　KV17　疑作
交響曲　KV18　K.F.アーベル作曲
交響曲　ヘ長調　KV98　疑作。J.ハイドン作曲との説がある。
*交響曲　ト長調《ランバッハ》K.deest　レーオポルト・モーツァルト作曲とされている。
ヴァイオリン協奏曲 ニ長調《アデライーデ》K.Anh.294a　偽作。アンリ・カザドゥシュ作曲 1930年

＊このレーオポルト作曲 ト長調『ランバッハ』シンフォニーはこの全曲演奏会シリーズで演奏予定です。ご期待下さい。

●交響曲　ト長調　Sinfonie in G　KV444〔425a〕＋Anh A53〔P16〕
（28歳　1784年2月～4月 ウィーンで作曲〈アラン・タイソンよる〉）
Adagio-Allegro con spirito,　Andante sostenuto,　Allegro Molto

【幻のシンフォニー　交響曲 第37番、KV444】

モーツァルトの死後、彼の遺品の中から一曲のシンフォニーのスコアが見つかった。
それは彼の筆跡による前半（序奏、アレグロとアンダンテの半分）と別人の筆跡による後半（アンダンテの残りの部分、メヌエットとトリオ、フィナーレ）を含んでいた。この作品はケッヒェル第一版でKV444という番号を与えられ、旧全集ではシンフォニー第37番として出版されたため、モーツァルトの作品として、しばしば演奏されてきた。しかしすでに1907年には――ゆっくりした序奏を除いて――ミヒャエル・ハイドンのシンフォニーである事が判明した。これは1783年5月、ミヒャエルボイエルン修道院の新院長就任を祝って作曲されたものである。

ここで1783年10月31日付の父親宛てのモーツァルトの手紙をご紹介しよう。

「ぼくら（ヴォルフガングとコンスタンツェ）はきのうの朝九時、当地に無事着きました。最初の日はフェックラブルックに泊まりました。翌朝、午前中にランバッハに到着、ちょうどミサに間に合って、オルガンで「アニュス・デイ」の伴奏をしました。・・・略・・・翌日ぼくらがリンツの門に着くと、一人の従僕がすでに待っていて、老伯爵のところへ送り届けてくれました。そこでいま、ぼくらは泊まっているというわけです。この家で、ぼくらがどんなに歓待されているか、とてもお伝えできないほどです。十一月四日、火曜日、ぼくはここの劇場で演奏会を開きます。そしてぼくは一曲もシンフォニーを持参していないので、大至急、新しい曲を書きます。
その日までに完成しなくてはなりません。さて終わりにしないといけません。もちろん仕事をしなくてはならないので。」

ヤーンとケッヒェルは、1783年に.KV444が作曲されたと論じた。すなわちモーツァルトがザルツブルグからウィーンへ帰る途中リンツに立ち寄り、突然コンサートを開くよう依頼されてKV425（リンツ・シンフォニー）を作曲したのと同じ機会のためである。だがリンツに立ち寄った際、シンフォニーを1曲も持ち合わせていないかったというモーツァルトの言葉を文字通り受け取るならば、当然ながら彼は自作シンフォニーもミヒャエル・ハイドンのシンフォニーも持っていなかったはずである。これまで多くの学者たちはKV444をモーツァルトがリンツで大急ぎで作曲した当のシンフォニーだと考えた。KV425こそ真の《リンツ》シンフォニーであると確認される頃までには、KV444をリンツと関係させたそもそもの（誤った）根拠付けは忘れられ、ひとつの神話が生まれてたのである。こうしてどのモーツァルト伝も、ケッヒェル作品目録のどの版も、ハイドンのシンフォニー

のモーツァルト・ヴァージョンを1783年リンツで作曲、と位置付けている。しかし今までの間違った仮説に基づている以上、KV444がリンツで作曲されたという説明には根拠がない。現在ではアラン・タイソンによる研究によって、モーツァルトの自筆譜は、1783年に彼がザルツブルグからリンツ経由でウィーンに帰って来た後、主として1784年の2月から4月までの3ヶ月間に使用した用紙に書かれていることが明らかにされている。

モーツァルトはいつどのようにして、この作品を手に入れたのだろうか？そしてなぜ彼は、この作品にゆっくりした序奏を付けたのだろうか？

【コンサートの必需品としてのシンフォニー】

モーツァルトは1780年代初めにウィーンで開いたおびただしい数のコンサートのために、多くのシンフォニーを必要としていた様である。
彼はそれをさまざまな手段で手に入れていた。たとえばギロヴェツッ（第4回 全曲演奏会プログラムノート参照）がモーツァルトを訪ねたとき、彼がモーツァルトに自分の作品（6曲のシンフォニー）を見せた時にモーツァルトは優しく彼に接し、作品を賛美し次の自分のコンサートで演奏させようと約束している。実際ギロヴェツッのシンフォニーは演奏された。1783年1月4日付の父親宛の手紙で、モーツァルトが《ハフナー》シンフォニーと一緒に1773年から75年に作曲した4つのシンフォニーを送ってほしいと大急ぎで依頼している背景には、ウィーンの聴衆のために新しいシンフォニーを必要としていた事実があった。モーツァルトのギロヴェツッに対しての親切は掛け値ないものであったろうが、自分のコンサートのために新しいシンフォニーが見つかって喜んだというのも事の一面であったろう。

それではなぜ多くのシンフォニーが必要であったのだろうか？それは当時の演奏会におけるシンフォニーの役割によるものと考えられる。

【演奏会の主役は独奏曲】

今では交響曲は演奏会の主役だが当時の書簡や資料から交響曲は独奏曲、コンチェルト、アリアに対して額縁の役割を果たすにすぎなかった。コンサートの初めと終わりに演奏されたのが交響曲であった。その意味では、この頃でも、交響曲の源であるオペラの開幕の合図としての導入曲と同じような性格が、保持されていたのである。1760年代までの聴衆は、コンサートに交響曲を聴きに出かけたのではなかった。コンサートの中心はあくまでも有名な、あるいは呼び物となった演奏家の独奏だった。極端に言えば、聴衆は交響曲の演奏を合図に会場に入ったのである。このことからもシンフォニーは演奏会になくてはならない必需品であり手元に多くの新しい交響曲を持っておく必要があった。

【写譜屋に不満？】

モーツァルトの書簡を見ると写譜屋に関して非常に神経を使っている。
1784年5月15日付の父親宛の手紙をご紹介しよう。

「リンツでトゥーン伯爵のために書いたシンフォニー〔KV425〕と四曲の協奏曲〔KV449～451、453〕を一緒に、今日郵便馬車で送りました。シンフォニーについてはむずかしく考えていませんが、四曲の協奏曲については(家で、あなたのそばで写譜してもらうよう)お願いします。
ザルツブルグの写譜屋は、ヴィーンよりも信用できませんからね。〔ザルツブルグの写譜屋のフェーリクス・ホーフシュテッター〕がハイドンの楽譜を二部ずつ写譜したのを、ぼくは確かな筋から知っています。現にぼくは、彼のもっとも新しい三つのシンフォニーを持っていますからね。」

この手紙の内容から、こっそり自分用の筆写譜を作ってしまおうという写譜屋の不誠実のこと。ザルツブルグの写譜屋が不誠実である証拠として、「ハイドン」の最新のシンフォニーの不正な写譜をあげていることからすれば、モーツァルトの言うハイドンはザルツブルグのミヒャエル・ハイドンで、不正なザルツブルグの写譜屋のおかげでモーツァルトがハイドンの3つの新作を1784年に手に入れたのではないかと思われる。そしてその中の1曲に序奏を付け、モーツァルトは次の新しい演奏会に備えたのではないかと想像する。

【ミヒャエル・ハイドン (1737～1806)】

若い時代のモーツァルトはミヒャエル・ハイドンから音楽的な影響を受けないわけにはいかなかった。ミヒャエル・ハイドンはおそらく最も才能のあるザルツブルグのシンフォニー作曲家であった。モーツァルト一家の往復書簡の中にハイドンは何度も登場している。それらの手紙は必ずしも彼の個人的な人柄を称賛するものではなかったが、彼の音楽、とりわけ教会音楽に対する称賛を示すものではあった。モーツァルトのシンフォニーとハイドンのシンフォニーを比べてみると、ハイドンはやや流行おくれの中欧的伝統に根ざすものに対し、若きモーツァルトは輝かしさと歌が交互にあらわれる、より現代的でイタリア的な様式を示している。ハイドンが国際的な様式を吸収できなかった理由はわからないが、モーツアルト一家の書簡やモーツァルトが勉強もしくは演奏のために写譜したミヒャエル・ハイドンの教会音楽5曲の自筆譜の存在はシンフォニー音楽よりも教会音楽で大きかったことを示している。それでもなお、シンフォニーにおけるモーツァルトとハイドンの関係は、これからも注意深く吟味する価値がある。

注:ミヒャエル・ハイドンは「交響曲の父」と呼ばれた、ウィーンのヨーゼフ・ハイドンの弟にあたる。

●交響曲　ニ長調　Sinfonie in D　KV81〔73l〕
（14歳　1770年4月25日 ローマで作曲）
Allegro,　Andante,　Allegro Molto

1769年12月13日、レーオポルト・モーツァルトは息子ヴォルフガングとともに、ザルツブルグを出発した。当初の予定より出発が大幅におくれたが、こうして翌々年1771年8月28日までつづく第一回イタリア旅行がはじめられるのである。召使も連れず、馬車も自家用のは故郷に残しての旅であった。

【レーオポルトの作品の可能性】

ウィーン楽友協会にあるKV73lの手書きのパート譜セットには、「騎士ヴォルフガンゴ・アマデーオ・モーツァルト作」「ローマにて一七七〇年四月二十五日」と書き込まれている。しかし1775年に出版されたブライトコプフ・ウント・ヘルテル社の主題目録の分冊では、この作品はレーオポルトのものとして掲載された。なぜこのような事が起こったのだろうか？ 現時点では研究者達は質の高さからヴォルフガングの作品として受け止めているようで、作曲家としてのレーオポルトを過小評価する傾向が見受けられる。ただレーオポルトのシンフォニーについては、本格的な研究が始まったばかりである。現代版出版社や録音で手に取ることができるのは、「目先の変った作品」〈農民の結婚〉〈おもちゃのシンフォニー〉〈パストラール・シンフォニー〉がおおかたを占めており、必ずしもレーオポルトの代表作ではない。きちんとした版や録音で手に取れる唯一の「シリアスな」シンフォニーが、いわゆる*《新ランバッハ》シンフォニーである。

新全集で最初期のシンフォニーを担当した校訂者は、KV73lを1770年4月25日付のモーツァルトの手紙の中でヴォルフガングが言及しているシンフォニーの1つと見なした。「親愛なるお姉さん・・・略・・・この手紙を終えたら、書きかけのシンフォニーアを仕上げます。アリアは出来上がりました。シンフォニーアは写譜屋さんのところにあります。（といっても、それはわが父上です）。・・・略・・・ローマ。一七七〇年四月二十五日」。ただレーオポルト作曲者説を支えるのは1781年2月12日のレーオポルトの手紙の中で、まだブライトコプフがヴォルフガングのシンフォニーを見たことがなく、「息子の作品のうち皆さんがごらんになったなったのはいくつかのクラヴィーア付きヴァイオリン・ソナタだけです」という言明である。これが事実だとすると1775年のブライトコプフの目録のKV73lがレーオポルトの作品となっていることも正しいわけである。

現時点ではこのシンフォニーの作曲者がヴォルフガングではなくレーオポルトである可能性が高くなってきている。レーオポルト側の研究者はKV81＝73lをレーオポルトの作品と見なしている。

＊このレーオポルト作曲 ト長調『ランバッハ』シンフォニーはこの全曲演奏会シリーズで演奏予定です。ご期待下さい。

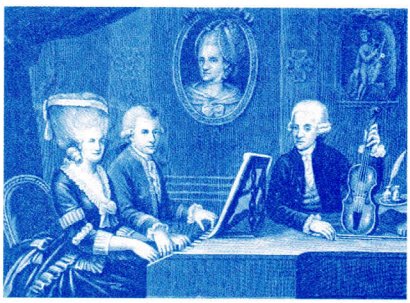
●交響曲　イ長調　Sinfonie in A　KV201〔186a〕
（18歳　1774年4月6日　ザルツブルグで作曲）
〈ただし自筆譜の日付は消しつぶされている〉
Allegro moderato,　Andante,　Menuetto -Trio,　Allegro con spirito

【レパートリーとして親しまれてきた逸品】

この作品については6ヶ月前の1773年10月5日に完成された、第25番ト短調KV183（小ト短調と呼ばれ、映画「アマデウス」の冒頭に使われた曲です）と並んでモーツァルトのウィーン旅行後に書かれた5曲の交響曲の中での傑作とされているもの。
第3回ウィーン旅行から帰った1773年9月下旬から1774年12月4日にミュンヘンに向けて出発までの1年2ヶ月あまりをモーツァルトは父母姉とザルツブルグで過ごす。（1774年という年は前回の第4回全曲演奏会でファゴット協奏曲が作曲された年）
このシンフォニーがまことに卓越した作品であることは、つとに認められてきた。この作品とト短調KV183とは、アルフレート・アインシュタインは「ひとつの奇跡」と絶賛しメジャー・オーケストラのレパートリーとなった、モーツァルトの最古のシンフォニーなのである。

【モーツァルト家の引越し】

ザルツブルグ滞在期間中、モーツァルト一家はゲトライデ通り（ガッセ）にあるハーゲナウアー家所有の借家（有名なモーツァルトの生家）から、ザルツァハ河対岸にあるハニンバル広場（現在のマルカト広場）の新しい借家に引越しをした。レーオポルトにとっては二人の子どもたちが成長していく最中で、大きな住居を持つことは久しい以前からの懸案だった。『タンツマイスターハウス』すなわち《舞踏家の家》。この新しい住居は当時からそう呼ばれていた。ちなみにレーオポルトは子がウィーンに、娘がザンクト・ギルゲンに去った後もこの大きな住居にひとりで住み、1787年、この家で世を去るのであった。現在では国際モーツァルテウム財団の努力によって修復され、モーツァルトの貴重な記念建築物のひとつとして現存している。



モーツァルト一家

●セレナード　変ホ長調　Serenade in Es KV375〔a8〕（今回は第二稿で演奏します。）
（第一稿、KV375〔a6〕25歳 1781年10月15日以前、ウィーン）
（第二稿、KV375〔a8〕26歳 1782年7月、ウィーン）
Allegro maestoso, Menuetto-Trio, Adagio, Menuetto-Trio, Allegro

『親愛なお父さん!
最初のアレグロしか入っていないので、びっくりしたでしょう。でも・・・ほかにどうしようもなかったのです。――大急ぎで夜曲を一曲書かなくてはならなかったのです。といってもそれは管楽器用で（さもなければ、お父さんのために使えたでしょうが）――三十一日の水曜日には、二つのメヌエットとアンダンテ、それに最終楽章を送ります。――できれば ――行進曲も送りますよ。――もしできなければ、「ハフナーの音楽」の行進曲（これは・ほとんど・知られていないので）、まあこれを使ってもらうよりほかにありません・・・略・・・最愛、最上のお父さん!――どうぞお願いです、後生ですから、ぼくが愛するコンスタンツェと結婚できるように同意してください。・・・略・・・』
モーツァルトが1782年7月27日、父レーオポルトに宛てた手紙である。この手紙の中に出てくる夜曲がKV375であろうと思われる（ちなみに最初のアレグロと最終楽章はたぶん「ハフナー交響曲KV385」）。第一稿は宮廷画家ヨーゼフ・ケッヒルの家で初演、第二稿は新設された皇帝の八重奏によるハルモニー楽団に合わせるために、おそらく急いで修正がくわえられたものであろう。その後、モーツァルトはコンスタンツェと8月4日にウィーンのシュテファンス寺院で結婚式を挙げることになるのだが、父レーオポルトは反対のままであった。

★参考文献　「最初期のモーツァルト伝」フランツ・ニーメチェク著、「交響曲の生涯」石多正男著、
「モーツァルト」メーナード・ソロモン著、「モーツァルト書簡全集」白水社、
「モーツァルトのシンフォニー」ニール・ザスラウ著、「モーツァルト大事典」ロビンズ・ランドン著、
「モーツァルトの世界」スタンリー・サディー著、名曲ガイドシリーズ 交響曲 音楽之友社

モーツァルト交響曲・全曲演奏会　♪今後の演奏会の予定♪

《第6回》
日時／2010年5月16日（日）
14:30開演
会場／ザ・ハーモニーホール（小ホール）
曲目／交響曲　第6番　ヘ長調　KV43
交響曲　変ロ長調　KV45b
交響曲　第21番　イ長調　KV134

《第7回》
日時／2010年10月3日（日）
14:30開演
曲目／交響曲　第15番　ト長調　KV124
ヴァイオリン協奏曲　第2番　KV211
管楽器アンサンブル